

泌 尿 器 科 紀 要

第 9 巻 第 9 号

昭和 38 年 9 月

随 想

CIBERT 教授との数日

東京医科大学教授 鈴 木 三 郎

LYON は京都に例えられる。しかし、風光は京都に劣る。学都であるのは京都のそれと変るものではない。そこに私は JEAN CIBERT 先生を訪ねた。学識人格ともにフランス泌尿器科学会の第一人者である。巴里滞在中に先生が学会では信望のきわめて厚い方と聞いていた。1958年の国際泌尿器科学会では COUVELAIRE 教授と「腸管の泌尿器科利用の適応」に就て特別講演をされており、また LA TUBERCULOSE RÉNALE SOUS L'ANGLE DE LA THERAPEUTIQUE (1946) は代表的な著書である。

私は南仏の日程をくりあげて予定よりも早く LYON に着いて病院地区行政当局と打合せをした。その翌日先生と JEAN D'ARC クリニックでお会いできるようになった。その当日、先生を待つ間に私のもとに手術室の看護婦が来て、まづさきに日本人の看護婦に会えとの話があつた。これは先生の取計いである旨を申し伝えた。私がおの方に会つて話すと、東京の方で ROME に派遣され、更に LYON の、このクリニックに勤務されている由。日本名は佐藤、しかしここでは MARIE MASSABELLIA YURI の洗礼名で呼ばれている。私は久方ぶりで、この方と日本の噂話をし、また先生のお人柄などもうかがつた。やがて、先生が部屋に入つて来られた。先生は長身で色が極めて白いふちなしの眼鏡がよく似合つた方である。物柔らかで、その声は女性的である。こんな優しい声の方がメスを執るのかと思うと、いささか不審の念がわいた。初対面の挨拶がすみ、先生の第一の質問は“長い旅をつづけてどうだつたか”と言われた。私は“フランス人が親切に教えてくれたのでどうやら此処にたどりついた”と答えた。先生は“真実にフランス人が親切だつたか。俺はそれが一番心配だつた。”と語られた。私はこの最初の言葉に普通人ならぬ先生を認めた。先生の手術の殆どがこのクリニックで行われた。その後助手連中と一緒に LYON 大学病院の EDWARD HERRIOT に行くのを例とした。ここで先生は外来や廻診をなさる。病床は100床で、先生の不在の時は PROF. AGRECE DURAND が任に当る。助手はフランス人2〜3名、他は BRÉSIL, POLOGNE, IRAN, ESPANGNE, AFFRIQUE の外人医師である。日本からは重松教授も先生を訪ねられたそうである。先生の部屋の壁には世界各地から先生を訪ねた医師の姓名が夫々の世界地図の上に記入されてある。

私が先生の手術を見学したのは腎孤立囊剔除、腎部分切除、再発の腎盂腎杯結石の切石術、腎瘻術、MILLIN 法、尿道下裂2例等であつた。先生は DENNIS-BROWN 法は全く行わないそうである。思師の MARION より DUPYTREN 法を教つたが、どうも思わしくない

ので今では瘻孔を残さない J. LEVEUF ET H. GONARD (1938) をすすめられていた。この論文の掲載された雑誌を傍におきながら手術をすすめられていた。これも一寸先生ならではできぬことである。入院患者で興味のある手術は下行尿路の固定として MARSHALL-MERCHETTI 法を行つた者、脊髓破裂手術後の膀胱状態観察中の者、巨大尿管 2 例であろう。また先生の外来診察は学生及び助手を集めて盛に討論される。例を挙げれば JOHNSON 法による水腎成形術、COUVELAIRE 法による尿管成形術、子宮癌による尿管腫瘍に対する膀胱形成術、膀胱癌剔除後の同様の症例等であつた。諸検査はもとよりピエログラムなどは 5, 15 分, 1, 1½, 2, 2½, 3, 3½ 時間までも撮影してあつた。

一夜、先生は私を夕食に招いて呉れた。同席は前述の各国の助手達である。先生は本来ならば自宅に呼ぶのだが令息の病気のために料亭に変更すると説明された。先生の書斎で小憩の後“ブラジールおばさんのお宿”とでも呼ぶ料亭に案内して下つた。私は巴里を出てから逐次食慾を欠き MONTPELLIER の TRUC 教授に夕食を招かれ、翌日の地中海海岸 VILLE VE LUTTE 療養所見学後再び同教授が助手 2 名と一緒に魚料理をすすめられた。その時、紅茶のみに過ぎた位で、既に私の胃潰瘍は相当進行していたのであろう。従つて CIBERT 先生に胃腸の具合を話して生がきの外 1~2 品にさせていただいた。勿論、ぶどう酒も飲めない。幾通りかの料理の運ばれる間、日本の風習、風光の話なども先生から質問された。また料亭の話も出たので、瓢亭の座敷の古さなども話してみた。その内に先生の皿に筍を煮たような料理が運ばれた。私はもの珍らしげなままに“それは何と呼ぶ料理ですか”と尋ねた。すると先生は食慾のない私に少しでも食べさせようと思つたのか“少し食べてみるかい”と言われた。先生の皿の筍のような煮つけは実は ARTICHAUT にほかならなかつた。ぶしつけに料理をたづねた失礼もとがめず優しく少し食べてみるかいと言う言葉は今までにない御馳走に思えた。ARTICHAUT は旅窓から畑に栽培されているもの、駅のケイ、青物屋の店でも見受けた。この料理はまづ小皿に自身でソースを作る。片手でこの野菜の球を押えて外側から皮をむき、そのつけ根の薄紫の肉をソースに浸して食べるそうだ。内側ほど肉も多くなり最後に焼茄子の皮をむいたような芯が残る。理由は知らないがこれが浮気女や男の心臓に例えられる COER D'ARTICHAUT と聞いていた。料理法によつては芯を抜き外側の一部を前菜などに使うそうだ。変つた料理法で出したものを私は筍のように思つたのである。それで私は先生に“この ARTICHAUT には心臓がありませんねえ”と話したところ先生は“私にはその必要がないよ”と答えられた。きびしい先生にもやはり冗談は理解できる。生粋のフランス人なのであろう。LYON を去る日が来た。先生にお別れの挨拶を申上げたところ先生は“私はいつか退職して余生を送る。その時、この壁に掛つている世界地図を見るのが楽しみとなろう。私は必らず日本を思い君の姿を思い浮べる。どうか帰国したら君の写真を送つてくれ”と語られた。私は聖者の掌を握る思いで別れの握手をした。異邦人として先生のこの言葉を髓にしみこませた。どこか温く深みを伴つて記憶の芯にひたつていた。

8 月中旬、ROME の修道女から消息があつた。“CIBERT 教授も一度は日本に行くとき切つていらつしやいましたから、その内日本で再会できるでしょう。私も LYON で多くを学びました。技術の数々も貴重で御座いますが、医学に身を捧げる者にとつて大切な真実と愛が CIBERT 教授等の働きの中に生々と輝いております。これをみた時、私は日本人として深く反省させられました”（以下略 原文のまま）

この消息をもたらししたのは誰れであるか、すでに読者はおわかりのことでしょう。